



赤石岳山頂に着く。心配していた積雪は岩稜の間に残る程度に融けて、滑ることなく思ひのほか順調だったのは幸運であった。南アルプス国立公園赤石岳の大標識が、どの山のものより立派に頭上に立っているほか一等三角点、展望図盤、測り量ヤグラなどある。頂上は広くないが細長い。

眺望はいまでもなく、南アの殆んどが一望でき、これから行く荒川三山が見えたえある一大岩壁を形成して、なかなかの迫力を見せている。振りかえれば聖岳が真南にマントをかけたように君臨している。

赤石避難小屋は最高点の手前(南寄り)の大きな凹地の中央にあり、三角形の新しい建物で、中4.5m奥行5.4mの大きさである。

3030mのピークからの下りは速い。少し下ったところより、左へ左へと回り込みながら、小石混じりのよく踏み込んだ固い岩稜の道で、ジグザグの急下降は、見る見うちに石カス礫の丹頂峰に着く。霊神碑だけが寂しく建っている。直ぐ下の大聖寺平と間違えられがちで「ダマシ平」の名が付けられたという。ここから真直ぐ下に見える道標まで10分ほど下れば「ほんとの大聖寺平」だ。正面は荒川岳だ。前岳の尾根岩稜の末端に遭難者レリーフが散め込まれている。

長大な赤石岳を越えて小屋着く。朝から4時間オヤツ無しによく頑張つてやって来た。富士を眺めながらパンを食べる。荒川小屋からの富士は均整がとれ、正面の黒桂岳・爪岳の稜線上に客員縁に42まつたように整然と浮かんで見える。日本一の秀峰3776m直距離50kmハ合目より上は純白の雪を頂いて……見える麗しさは秋ならでは近距離感だ。

大聖寺平からは、前岳稜線を避けて、山腹につけられたゆるやかな下り勾配のトラバース道を行く。荒川岳の核心部へ入って行くように左へ回り込むと、前岳への登路の直下は、新稜の青い屋根が眼にとまる。これが2階建の荒川小屋で立派なものだ。

最低鞍部より岩石の斜面につけられた踏跡を南面から回り込むように登って行く。思ったより急登でなく、3人の歩調もピッタリ合っている調子だ。突出した岩峰を廻り平坦に出て、直ぐとスリ鉢状の小石カス礫の斜面を登り詰める。昨日降った新雪が岩肌に着いて残っている。スリ鉢状をジグザグ切つて乗越せば右側はガレ、岩稜の下りになり、赤石の形相が判る。

百間平は東西1kmに及び、見渡す限りの草原とハイマツの広々とした高台で、L曠野の用心棒が馬に乗って現れそうだ。青々としたすばらしい散歩コースの正面にひかえる赤石岳の岩壁は灰紫の荒々しい形相で、昨日降った初雪が岩肌を塩を振りかけたように付着している。南ア南部の魅力溢れる山、最大のボリュームと縦走路唯一の高さ誇る赤石は眼前だ。

シーズンにはお花畑に囲まれて、色鮮やかにテントの花が咲き、若いパーテーで賑合うキャンプ地の間を通り抜けて、右への登りに入る。分岐の導標より岩塊の石段状の登り、どんどん高度も稼いで百間平の肩に取りつく、12日に見えなかった大沢岳・中盤丸山～兎岳の一風変わった山容が青々と、清楚な姿で朝陽に輝いているのが、なんともいえない若い感じをかもしている。

想い出の百間洞をあとに、いよいよ今日は赤石山脈の盟主赤石岳及び荒川三山の前岳・中岳・要沢岳を経て丸山と、3000m級5つの山々を越えるのだ。2日間の休養で元気一杯……カラリと晴れ上がった青い空を見上げ、はやる気まおさえての登高第一歩が冷気を破る。

昭和50年  
10月14日 快晴 朝4℃  
朝は風無し 赤石岳で7～8℃